

近世軒平瓦の分類について

ー 甲府城を例にしてー

柏 木 秀 俊

-
- | | |
|-----------|--------------------|
| 1 はじめに | 4 発掘調査で得られた軒平瓦のデータ |
| 2 甲府城の歴史 | 5 考察 |
| 3 軒平瓦分類試案 | 6 おわりに |
-

1 はじめに

近年全国各地で近世城郭の発掘調査が盛んに行われている。その調査で出土する遺物の大半が瓦であろう。しかし、その瓦も縄文土器のような編年が確立しておらないため、時期決定をする参考資料にはなりにくく、瓦落多として扱われがちで、わずかに鯰瓦や鬼瓦などその形状に特徴のあるものに目をむける程度である。この程、織豊期城郭研究会より『織豊期城郭の瓦』が刊行された¹⁾。織豊期に築城期をもとめられる全国の城郭調査資料をもとに、それらの瓦を網羅したもので、分類や編年方法に多くの視座を示している。むろん甲府城も織豊期に築城されたものだが、この時期の瓦の出土量は相対的に少なく、むしろ江戸時代に入ってからのものがその大部分を占める。そこで今回は出土量も多く、文様の種類も豊富な軒平瓦に着目し、なおかつ時間軸を江戸時代に限定し、上記の雑誌に示された分類・編年観をもとに分類を試みた。

2 甲府城の歴史

(1) 城主の変遷

甲府城が築城された場所は、一条小山と呼ばれた東西200m、比高差30m程の独立した安山岩の山であり、中世には時宗の名刹である一蓮寺があった。本能寺の変後、甲斐を領有したのは徳川家康だが、後北条氏滅亡後の家康の関東移封に伴い、甲斐は豊臣秀吉により領有されることとなる。そうした状況下、甲斐は秀吉にとって対家康の拠点ともいえるべき重要性を持たされたのである。その結果、秀吉に近い人物として羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長父子らが城主として次々と甲府に入城してきた。しかし、慶長5年(1600)関ヶ原の戦い後、浅野氏は和歌山に移封され、甲府は再び徳川領となる。甲府を江戸防衛の要として重要視した江戸幕府は、徳川家康の九男の徳川義直(後に尾張藩主)、2代将軍秀忠の子忠長、3代将軍家光の子綱重とその子綱豊(後の6代将軍)を次々と甲府城主にしていっていった。宝永元年(1704)からは、甲斐出身で5代将軍の側用人であった柳沢吉保、その子吉里が甲斐国の内15万余石を拝領した。しかし、享保9年(1724)には再び幕府直轄地となり、明治維新を迎えた。このように甲府城は豊臣政権・江戸幕府にとって重要な拠点であった。

(2) 築城と修築

甲府城を本格的に築城したのは、加藤光泰が城主になった天正19年(1591)からである。

「天正十八寅年豊臣少将封ヲ本州ニ受ケ、明年加藤遠江守光泰代ル、是ニ於テ修築之功ヲ興ス、一条ノ旧記ニ平岩七之助城代ノ頃ニ寺ヲ遷ス可キ地ヲ賜リ、加藤之時ニ及テ寺ヲ遷ス由記セリ」(『甲斐国志』提要部府治)²⁾とあることから、光泰が家康の基本計画に沿って一蓮寺を移し、築城を進めたことがわかる。さらに文禄の役で渡鮮した光泰は文禄2年(1593)、留守居の家老にあてた書状で「其の国ふしん、土手、ひかしの丸、石かき出来候や。此の表事、上様御存分に申付候。帰国仕り、城をやかて見可申候。(略)」(『大州加藤文書』)³⁾とあり、陣中でも築城に対する姿勢が積極的であったことを窺わせる。光泰はこの後陣中で没し、代わった浅野長政・幸長父子の手により慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いまでの間に、ほぼ築城は終了したのであろう。浅野氏移封後、入城した平岩親吉の時に「甲州ニ新タニ府之城ヲ築キテ、之ニ居スル」(『甲斐国志』人物部第九平岩主計頭親吉)⁴⁾とあることからわかる。この後、甲府城に大修築の手が入るのは綱重の時である。築城後50余年の歳月が過ぎ、甲府城の破損も目立ってきたという。「寛文四年二月廿七日、甲府御城地、御普請可成サ被可キ由、被仰渡サ、之レニ依り御普請料、御金貳万両、之レヲ進メ被ル之由、仰セ渡サ被ル也。四月十三日、出雲守、雨宮十兵衛同道ニ而登城、是ハ甲府御城之絵図十兵衛持参、御城破損以下之義、御老中え伺ハ被可キ為メ也。

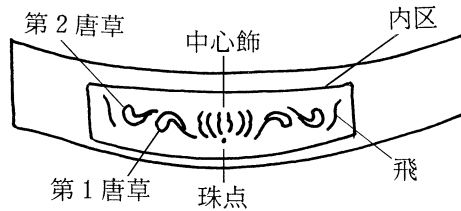
閏五月廿一日、知足院え淡路守方より切紙を遣ハス、甲府御城之柱立、吉辰御覧候而給フ可キ之由也。

十月十二日、山口出雲守、甲府御城普請遣ハサ被ル見分ノ為メ云々。

十一月廿一日、甲府御城、御普請出来ニ付、諸奉行御目見、下サ被物ノ次第、呉服二雨宮十兵衛、銀三十枚小長谷猪左衛門、白雀一、箱入櫃壺箱竹川監物、云々」(『甲府日記』寛文四年条)⁵⁾寛文4年(1664)に幕府から修理費として2万両を支出させ、およそ半年間で修築をおこなった。次に記録で見ることができる修築は、宝永3年(1706)柳沢吉保の時代になってからであった。「城ノ端門由り入ル、隍塹深ク広ク、石壁峻峙、敵臺雉堞壯麗言フ可カラズ、相顧ミテ曰ク、小都城ト謂フ可キ也、唯ダ樓上ニ蚩尾無シ、之ヲ訊ヘバ則チ云フ、古来ヨリ此ノ如シト、何ニ謂レカヲ知ラズ、(中略)内城惣テ十一、曰ク楽屋曲輪、曰ク屋形曲輪、曰ク台所曲輪、曰ク稻荷曲輪、曰ク鍛冶曲輪、曰ク数寄屋曲輪、曰ク清水曲輪、曰ク帯曲輪、曰ク天守曲輪、曰ク二ノ丸、曰ク本丸、(後略)」(『風流使者記』)⁶⁾荻生徂徠が宝永3年(1706)9月10日に使命を奉じて、甲府城に登った時の記述である。甲府城に対する感想を「壮麗」だけでは物足りずに「小都城」という表現まで用いている。また、内城の曲輪名を列挙するなど柳沢吉保の時代に現在の甲府城の姿がほぼ完成していると見てよいだろう。享保9年(1724)柳沢吉里が大和郡山に移封されるのに伴い、甲府に勤番制がしかれたが、明治維新までの間(慶応2年(1866)に勤番制が廃止され、城代が置かれるが)、享保12年(1727)には甲府城が大火に見舞われても、史料に残るような大規模な修築は確認されていない。

3 軒平瓦分類試案

古代瓦中心の研究がなされていく今日、近世瓦の名称、あるいは瓦各部の呼称はその研究者



第1図 軒平瓦各部呼称

によって表現が異なる場合があった。本稿では次のように呼称することとする⁷⁾。

分類をすすめていく前に、甲府城で出土している軒平瓦の概略について少し触れておく。均整唐草文の形態をとり、中心飾が3葉、あるいは5葉で第1唐草、第2唐草の存在が確認でき、飛は存在しない軒平瓦は、金箔の施されている鯨瓦・鬼瓦類などとほぼ同一の層で数多く確認されてきた(第2図-1・2)。また織豊期城郭研究会の木戸雅寿氏がすすめる、織豊期瓦の分類・編年などと比較した上でも近似する部分が多く確認でき、甲府城築城期のものと確定できる。次に棧瓦である。棧瓦は、本瓦葺の平瓦と丸瓦を1つにまとめたもので延宝2年(1674)近江三井寺に出入りの瓦工であった、西村半兵衛の発明によるものである⁸⁾。甲府城で確認される棧瓦は中心飾、唐草文も多種多様にわたっている(第2図-3・4・5・6)。また、その表面には雲母粉(キラコ)⁹⁾が大量に付着していることも認められる。これら棧瓦は、発明された時期が甲府城築城から80余年たっていることから、先に触れた中心飾が3葉・5葉の軒平瓦よりは、新しいことはわかる。

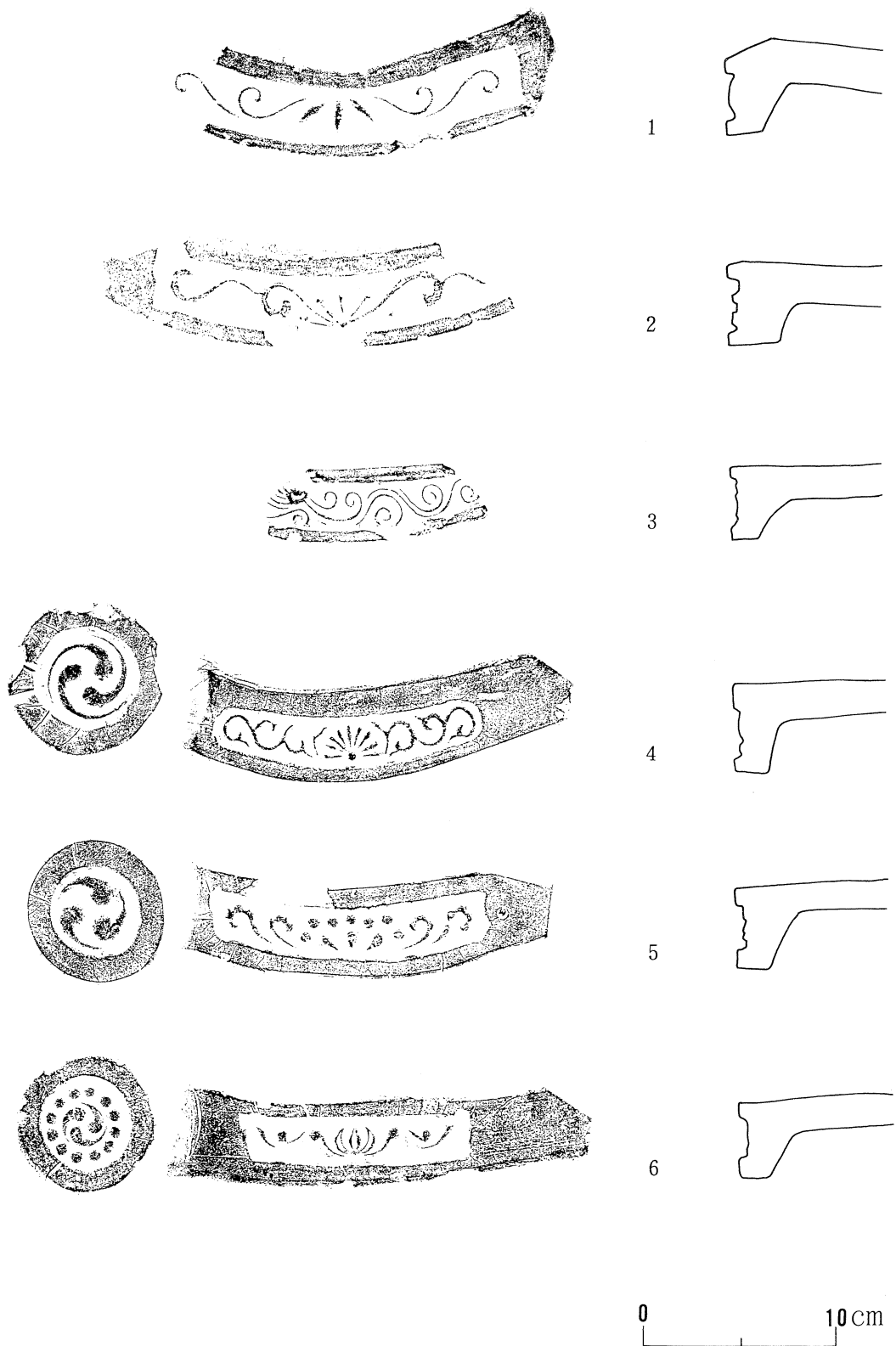
今回分類する軒平瓦は、上記以外のものである。均整唐草文の形態をとるもののうち、さらに第1唐草・第2唐草の表現方法に着目した結果、2重線により表現されているものが数多くある。これを「2重唐草文」と呼称する。甲府城の調査では、軒平瓦全体で4239点も確認した。5年近くの発掘調査で取りあげた瓦の総量は、現在までで200tを越える。2重唐草文瓦は、4239点の内1530点を数え、総数の36.1%を占める。この数字は興味深い。築城期の3葉・5葉、その他の本瓦、棧瓦でも2重唐草文以外のものなど文様で見ていくと、かなりの数になる。しかし、そうした瓦と比較しても2重唐草文の出土量は圧倒的に多い。この相対的な多さから、2重唐草文に時期、あるいは地域的な特色の存在を推測することができる。ここでは、この2重唐草文を有する軒平瓦の分類を試みる。

< 2重唐草文分類試案 >

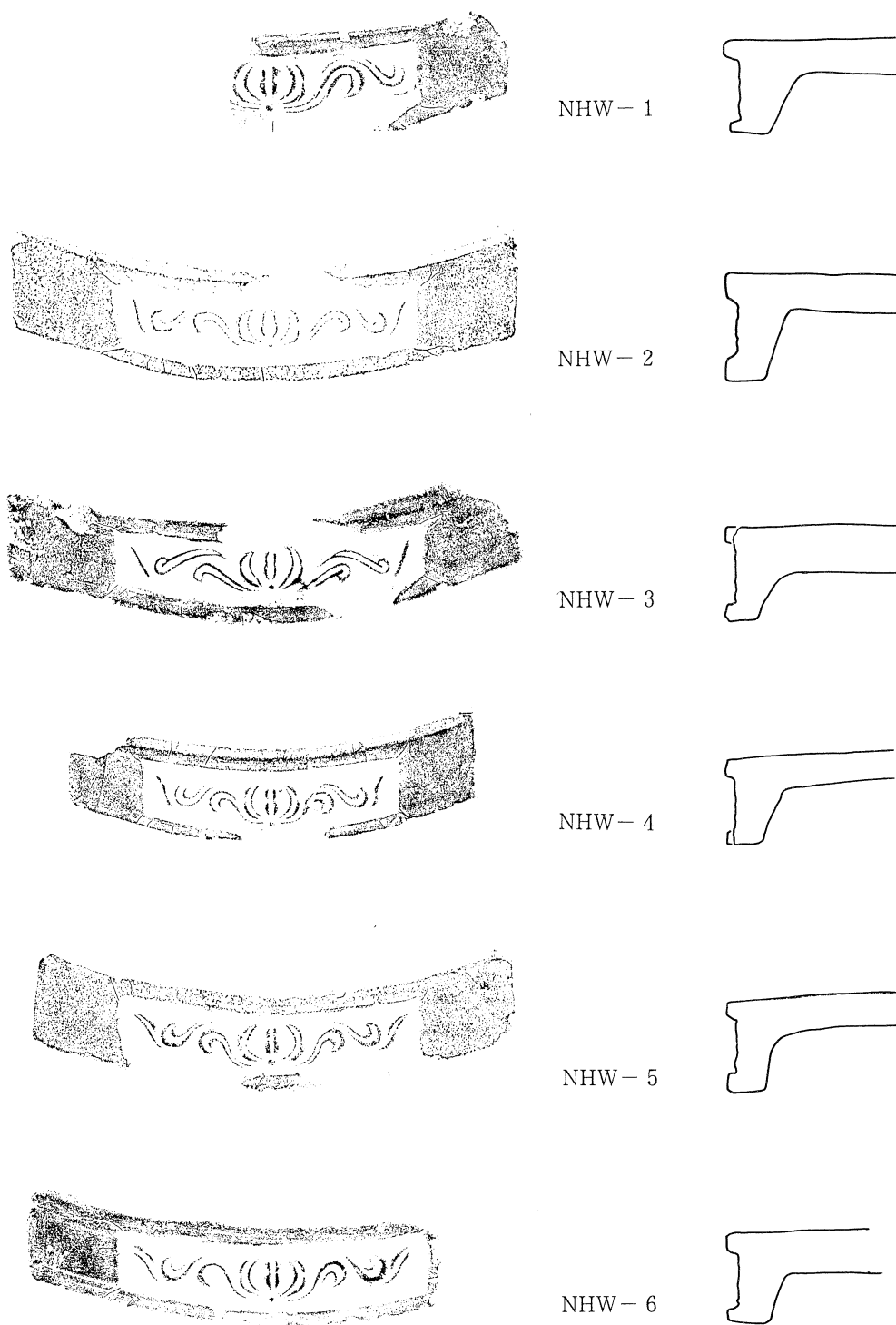
2重唐草文を分類していく目安としては、次に列挙する通りである。

- 1 中心飾が2重であること。
- 2 第1唐草・第2唐草の形状の差。
- 3 飛の有無、形状の差。
- 4 内区の縦の大小。
- 5 雲母粉(キラコ)がないこと。

以上の点に留意して分類をすすめていくと12種類になり、表記上N(軒)H(平)W(2重)とする¹⁰⁾。



第 2 図 軒平瓦・棧瓦型式一覽

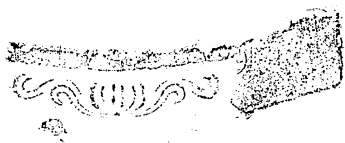


0 10cm

第3図 2重唐草文型式一覧(1)



NHW-7



NHW-8



NHW-9



NHW-10A



NHW-10B



NHW-11



NHW-12



0 10cm

第4図 2重唐草文型式一覧(2)

NHW-1 (第3図) 第1唐草の2重線が中心飾の下部から発生する。第2唐草は第1唐草上部より発生する。第1・第2唐草共に長い。飛は第2唐草の下部からほぼ真横に向かって1本出る。内区の縦は約2.5cm。

NHW-2 (第3図) 第1唐草は1本が中心飾の下部から発生し、途中から2重線となる。第2唐草は第1唐草とは重ならない。飛は縦に1本。内区の縦は約2.5cm。

NHW-3 (第3図) 第1・第2唐草共に丸みが少なく、直線的になる。飛は短かく縦に1本。内区の縦は約2.5cm。

NHW-4 (第3図) 第1・第2唐草共にNHW-2の形状に似る。飛は縦に1本だが、1ヶ所くびれる。内区の縦は約2.5cm。

NHW-5 (第3図) 第1・第2唐草共にNHW-2の形状に似る。飛が縦に2本、内側の方が短い。内区の縦は約2.5cm。

NHW-6 (第3図) 第1・第2唐草共に巻き込みの内側の線が極めて短い。飛は縦に2本、内側の方が短い。NHW-5に似る。内区の縦は約2.5cm。

NHW-7 (第3図) 中心飾下部の珠点がない。第1唐草は中心飾脇から1本出る。途中から枝分かかれし、2重線となる。第2唐草は第1唐草上部から発生する。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

NHW-8 (第4図) 第1・第2唐草共にNHW-1に似る。ただし、第2唐草の1本は第1唐草の巻き込みより外側から発生する。飛はない。内区の縦約2cm。

NHW-9 (第4図) 第1・第2唐草共に巻き込みが球体になり、唐草は直線的になる。NHW-3に似る。ただし、第2唐草の1本が中心飾脇から発生する。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

NHW-10A (第4図) 中心飾が上に向って開く。唐草についてはNHW-2に似る。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

NHW-10B (第4図) 中心飾は開かず。それ以外はNHW-10Aと同じ。

NHW-11 (第4図) 中心飾、唐草共にNHW-10に似る。ただし、どちらも作り方が粗雑になっている。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

NHW-12 (第4図) 中心飾は内側に閉じ、球体のように見える。唐草は2重唐草のどれとも似ない。第1・第2唐草の明確な区別が難しい。飛は縦に1本。内区の縦約2cm。

注) NHW-10については中心飾の開き・閉じが確認されるのでそれぞれ10A・10Bとする。それ以外の2重唐草文については中心飾の開き・閉じは確認できなかった。

4 発掘調査で得られた軒平瓦のデータ

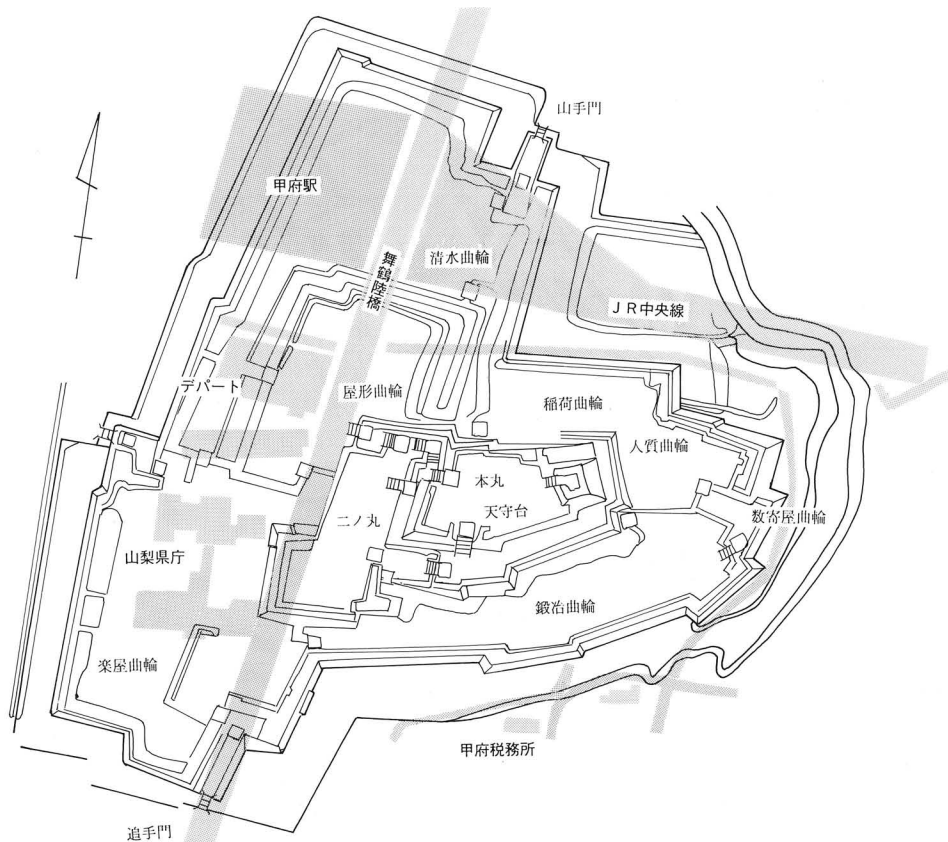
(1) 分類別出土地別データ

2重唐草文の出土点数は、総数で1530点を数えるが、12分類の内、最も多いのがNHW-10であり、29.7%にのぼる。その次にくるのがNHW-2の15.8%、NHW-11の15.4%、NHW-

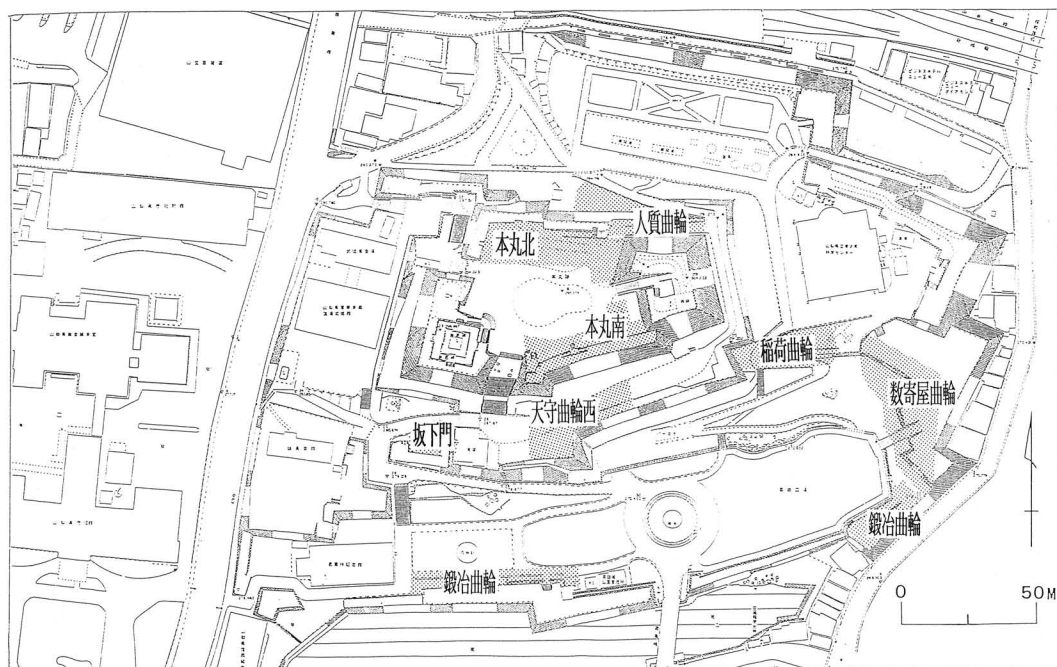
3の10.2%である。それ以外は、軒並み1ヶ台におさまっている。分類の基準となる条件を見ていくと、NHW-10・2・11は内区が2.5か2cmの違いが認められるが第1・2唐草、飛、中心飾についてはかなり似通っている。また、NHW-3・9についても同様のことがいえる。これらのことから推測するに、2重唐草文の中でもNHW-2・10・11系とNHW-3・9系の2つのグループが存在する。出土地別に見ていくと、特定の瓦が1ヶ所に集中しているわけでもなく、ほぼまんべんに出土している。このことは、2重唐草文がある特定の建物に使用されたわけではなく、甲府城全域の建物に使用されたと見るべきであろう。ただし、各出土地の総数を見てもわかるように総数の中で、ばらつきがある。このことは、調査区面積の大小、瓦溜の有無という差によるものである。ただNHW-10のみが各出土地で30%前後の率を残していることに注意しておきたい。

(2) 層位的データ

ここでは人質曲輪北下¹¹⁾で設定した2カ所のトレンチで層位的に2重唐草文の出土状況を見ていく。人質曲輪北下の性格であるが、天守台下に存在する人質曲輪、及び本丸櫓の北側に位置し、平成2・3年次の調査においては、鬼瓦・鯪瓦・五三の桐鬼板瓦・飾り瓦など約50点の金箔瓦類を確認した場所である。また、これら金箔瓦類も層位的に確認することができるので瓦の新旧関係をつかむのに適した場所であるといえる。ここでは2カ所のトレンチをA・Bとし、トレンチAのデータを表3、トレンチBのデータを表4にあらわす。また表3のA～D層と表4のa～f層は位置的にほとんど差がないので、同様のものと見なすことにする。表3・4共に金箔瓦層はD層・f層に該当する。表3の場合、2重唐草文が軒平瓦総数の中で占める割合は28%であるが、D層はこの数値を下回っている。表4の場合、2重唐草文が軒平瓦総数の中で占める割合は16.4%と表3に比べるとその比率が下がるが、金箔瓦層にあたるf層に2重唐草文が1点も含まれていない。各層は瓦層であるため、瓦の大量廃棄の時に形成されたものと見なすことができる。次に各層を見ていくと表3の場合、B層・D層に2重唐草文が多く出土し、なおかつNHW-2・10・11とNHW-3・9に集中する。分類別出土地別データの項でも述べたように、唐草の形態からこの2つのグループは存在することは明らかである。NHW-2・10・11のグループの場合、D層にNHW-2・10が多く、B層でNHW-11が急増する。またNHW-3・9のグループの場合、D層よりB層のほうが多い。表4の場合、b層・d層の出土量が多く、NHW-2・10・11のグループではd層にNHW-2が多く、b層でNHW-10が増える。NHW-3・9のグループでは、d層よりb層のほうが多い。この表3・4にあらわれる傾向の共通項を見ると、NHW-2・10・11グループのほうがNHW-3・9よりも古く、グループの中でもNHW-2・10のほうがNHW-11より古いと言えそうである。また具体的な時期は、築城期に使用されていたと思われる金箔瓦が数多く存在する層に2重唐草文が少ない（あるいはほとんどない）ことから、2重唐草文が使用された時期が築城期以降、江戸時代に入ってからと推測できるのではないだろうか。また、表3・4共に12分類の内NHW-2・3・10・11が出土量のほとんどを占め、ここでも出土地別のデータと同様のデータと



第 5 図 甲府城市街化図



第 6 図 2 重唐草文出土位置図



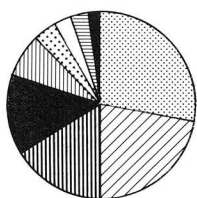
第7図 瓦葺建築物位置図

	稲荷曲輪	数寄屋曲輪	天守曲輪西	人質曲輪	人質曲輪北	鍛冶曲輪	本丸北	本丸南	坂下門	その他	合計
NHW-1	0	0	1	1	0	0	9	0	1	0	12
	0	0	0.8%	2.2%	0	0	3.1%	0	1.6%	0	
	0	0	8.3%	8.3%	0	0	7.5%	0	8.3%	0	0.8%
NHW-2	6	17	16	16	72	48	50	3	11	3	242
	4.5%	5.4%	12.4%	35.6%	31%	17.1%	17%	10%	17.7%	2.5%	
	2.5%	7%	6.6%	6.6%	29.8%	19.8%	20.7%	1.2%	4.5%	1.2%	15.8%
NHW-3	4	17	23	4	32	43	23	2	8	0	156
	3%	5.4%	17.8%	8.9%	13.8%	15.3%	7.8%	6.7%	12.9%	0	
	2.6%	10.9%	14.7%	2.6%	20.5%	27.6%	14.7%	1.3%	5.1%	0	10.2%
NHW-4	1	19	10	0	1	6	3	0	1	0	41
	0.7%	6.1%	7.8%	0	0.4%	2.1%	1%	0	1.6%	0	
	2.4%	46.3%	24.4%	0	2.4%	14.6%	7.3%	0	2.4%	0	2.7%
NHW-5	10	8	6	3	14	16	31	1	0	1	90
	7.5%	2.6%	4.7%	6.7%	6%	5.7%	10.5%	3.3%	0	8.3%	
	11.1%	8.9%	6.7%	3.3%	15.6%	17.8%	34.4%	1.1%	0	1.1%	5.9%
NHW-6	4	20	0	0	5	22	32	0	0	0	83
	3%	6.4%	0	0	2.2%	7.8%	10.9%	0	0	0	
	4.8%	24.1%	0	0	6%	26.5%	38.6%	0	0	0	5.4%
NHW-7	1	16	4	0	0	5	1	0	0	1	28
	0.7%	5.1%	3.1%	0	0	1.8%	0.3%	0	0	8.3%	
	3.6%	57.1%	14.3%	0	0	17.9%	3.6%	0	0	3.6%	1.8%
NHW-8	0	11	1	0	0	10	0	1	0	0	23
	0	3.5%	0.8%	0	0	3.6%	0	3.3%	0	0	
	0	47.8%	3.6%	0	0	43.5%	0	3.6%	0	0	1.5%
NHW-9	19	10	0	2	8	38	19	2	3	1	102
	14.3%	3.2%	0	4.4%	3.4%	13.5%	6.5%	6.7%	4.8%	8.3%	
	18.6%	9.8%	0	2%	7.8%	37.3%	18.6%	2%	2.9%	1%	6.7%
NHW-10	30	98	39	16	78	74	88	11	17	4	455
	22.6%	31.4%	30.2%	35.6%	33.6%	26.3%	29.9%	36.7%	27.4%	33.3%	
	6.6%	21.5%	8.6%	3.5%	17.1%	16.3%	19.3%	2.4%	3.7%	0.9%	29.7%
NHW-11	37	82	27	3	22	19	13	10	20	2	235
	27.8%	26.3%	20.9%	6.7%	9.5%	6.8%	4.4%	33.3%	32.2%	16.7%	
	15.7%	34.9%	11.5%	1.3%	9.4%	8.1%	5.5%	4.3%	8.5%	0.9%	15.4%
NHW-12	21	14	2	0	0	0	25	0	1	0	63
	15.8%	4.5%	1.6%	0	0	0	8.5%	0	1.6%	0	
	33.3%	22.2%	3.2%	0	0	0	39.7%	0	1.6%	0	4.1%
合計	133	312	129	45	232	281	294	30	62	12	1530

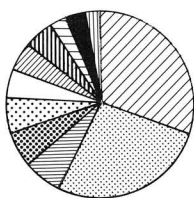
A	A段 実数
B	B段 A段の実数/出土地総数
C	C段 A段の実数/分類別総数

分類互合計欄の％は 分類別総数/2重唐草文総数

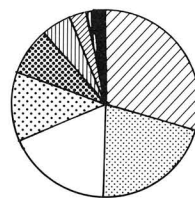
表1 2重唐草文分類別出土地別集計表



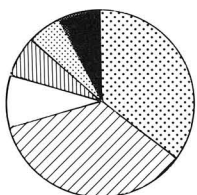
稲荷曲輪



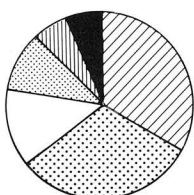
数寄屋曲輪



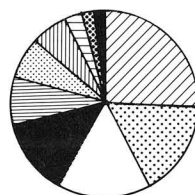
天守曲輪



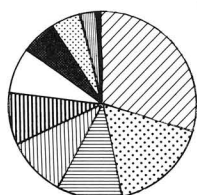
人質曲輪



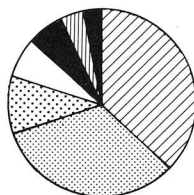
人質曲輪北下



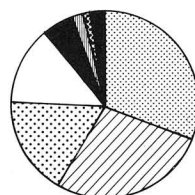
鍛冶曲輪



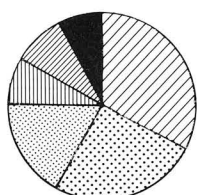
本丸北



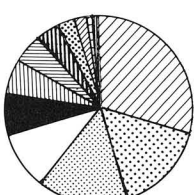
本丸南



坂下門



その他



合計



NHW-1



NHW-2



NHW-3



NHW-4



NHW-5



NHW-6



NHW-7



NHW-8



NHW-9



NHW-10



NHW-11



NHW-12

表2 2重唐草文出土地別円グラフ

第8図 人質曲輪北トレンチ位置図

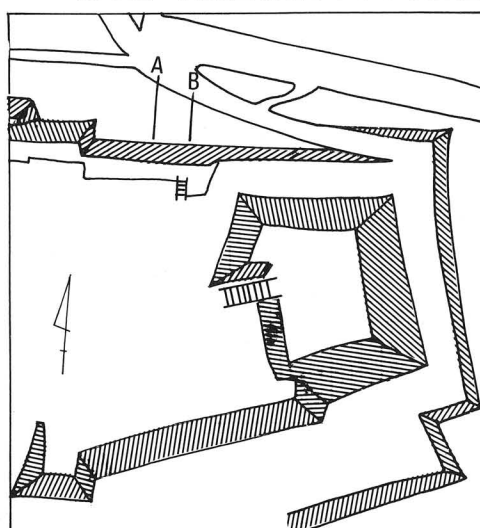


表3 2重唐草文相対表 (トレンチA)

	A層	B層	C層	D層	合計
NHW-1	0	0	0	0	0
NHW-2	0	13	3	8	24
NHW-3	0	4	0	1	5
NHW-4	0	0	0	0	0
NHW-5	0	0	0	2	2
NHW-6	0	0	0	0	0
NHW-7	0	0	0	0	0
NHW-8	0	0	0	0	0
NHW-9	0	4	0	0	4
NHW-10	5	12	1	11	29
NHW-11	2	13	0	1	16
NHW-12	0	0	0	0	0
計 (a)	7	46	4	23	80
軒平瓦総数 (b)	19	114	14	138	285
a/b	36.8%	40.4%	28.6%	16.7%	28%

第9図 人質曲輪北トレンチA土層図

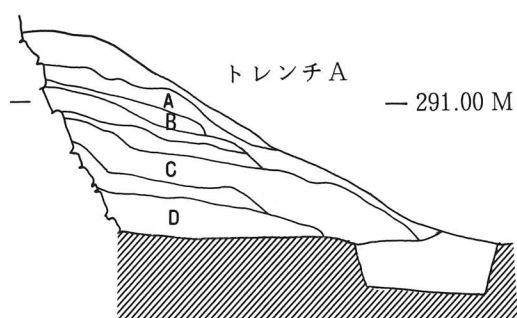
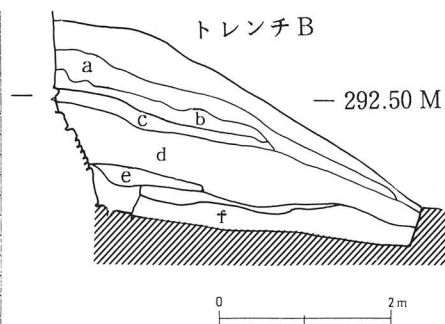


表4 2重唐草文相対表 (トレンチB)

	a層	b層	c層	d層	e層	f層	合計
NHW-1	0	0	0	0	0	0	0
NHW-2	0	11	1	13	1	0	26
NHW-3	0	13	0	4	0	0	17
NHW-4	0	0	0	0	0	0	0
NHW-5	0	3	0	0	0	0	3
NHW-6	0	1	0	0	0	0	1
NHW-7	0	0	0	0	0	0	0
NHW-8	0	0	0	0	0	0	0
NHW-9	0	0	0	1	0	0	1
NHW-10	0	6	0	1	0	0	7
NHW-11	0	0	0	1	0	0	1
NHW-12	0	0	0	0	0	0	0
計 (a)	0	34	1	20	1	0	56
軒平瓦総数 (b)	19	84	13	46	3	177	342
a/b	0%	40.5%	7.6%	43.5%	33.3%	0%	16.4%

第10図 人質曲輪北トレンチB土層図

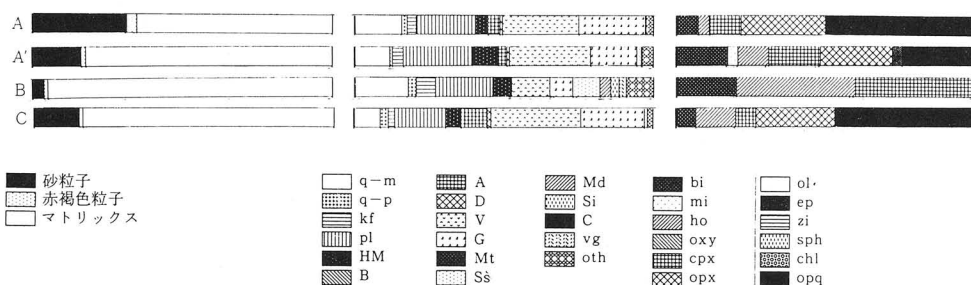


なっている。

(3) 胎土分析によるデータ

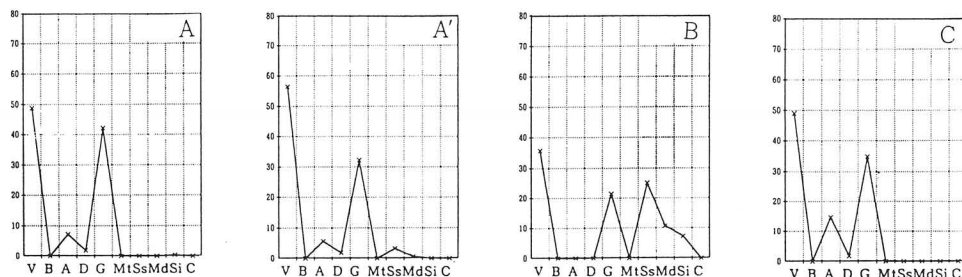
「甲府城Ⅱ」の中で、河西学氏により甲府城出土瓦の胎土分析がおこなわれている¹²⁾。この分析では瓦胎土の岩石鉱物組成中心に分類を行なっている。今回の2重唐草文の分類において胎土分析の中から、興味深いデータがあったので改めて検証して見たい。第2図にある1・2は先にも触れたが、築城期に位置する均整唐草文の5葉・3葉の軒平瓦である。この2点をA・A'とする。第2図3～6は棧瓦でその表面には、大量の雲母粉(キラコ)が確認できる。この中の3をBとする。さらに今回分類している2重唐草文をCとする。これらA・A'・B・Cの胎土中の岩石鉱物組成は以下の表のようになる。

河西氏はこの分析の中で、A・A'・Cが同様の組成を示し、Bがやや異なるとしている。全体組成は砂粒子が3.9～31.6%であり、とくにBが少ない。赤褐色粒子は1～3.5%マトリックスは65～95.1%である。岩石鉱物組成はA・A'・Cは変質火山岩類(25.6～30.1%)・花崗岩類(15.6～22.2%)を主体に斜長石(17.1～23.2%)・石英(11.4～17.4%)・カリ長石・重



q-m石英結晶(含β型) q-p石英多結晶 kfカリ長石 pl斜長石 HM重鉱物 B玄武岩 A安山岩 Dデイサイト V変質火山岩類+凝灰岩 G花崗岩類 Mt変成岩(含ホルンフェルス) Ss砂岩 Md泥岩 Si珪質岩 C炭酸塩岩 othその他 bi黒雲母 mi無色雲母 ho角閃石 oxy酸化角閃石 cpx単斜輝石 opx斜方輝石 olカンラン石 ep緑簾石 ziジルコン sphスフェーン chl緑泥石 opq不透明鉱物

表5 軒平瓦岩石鉱物組成表(『甲府城Ⅱ』山梨県教育委員会1992より引用)



V変質火山岩+凝灰岩 B玄武岩 A安山岩 Dデイサイト G花崗岩類 Mt変成岩類(含ホルンフェルス) Ss砂岩 Md泥岩 Si珪質岩 C炭酸塩岩

表6 軒平瓦岩石組成折れ線グラフ

(『甲府城Ⅱ』山梨県教育委員会1992より引用)

鉍物・安山岩などを伴う。Bは斜長石（19.2%）・石英（20.5%）・カリ長石（2.3%）・重鉍物（6.4%）・変質火山岩類（12.8%）・花崗岩類（7.7%）・砂岩（9%）・泥岩（3.9%）などからなる。重鉍物組成は不透明鉍物（0～50%）・単斜輝石（7～40%）・斜方輝石（0～29%）・角閃石（4～40%）・黒雲母（7～20%）などから主に構成される。さらに河西氏は甲府盆地、八ヶ岳南麓周辺地域の河川砂との比較をおこない、A・A・Cが新第三系分布地域の河川堆積物と類似性が高いとし、Bについてはその度合いが高くないと前置きをし、塩川および荒川の河川砂との類似性を示している。これらのデータから2重唐草文が比較的新しい時期に使用された棧瓦より、築城期の瓦とその胎土において類似することはとても興味深い。

5 考察

今回の分類では、2重唐草文が12種類確認できたが、基本的にはNHW-2・10・11系とNHW-3・9系との2つが大きな柱となる。それ以外のものは、この2つの柱からの支流と見ていだろう。NHW-2・10・11あるいはNHW-3・9の差は、内区の縦が2cmか2.5cmというところに起因する。しかし、この差も厳密にとれば、さらに細分化することができるが、瓦の焼成の状況の違いで焼き締まりも異なってくることから、今回の分類の中ではこれ以上の細分化は試みなかった。5年間の発掘調査の中で、総数の36.1%を占める1530点という数の瓦が意味するものは何なのか。これまでのデータをもとに考察をしていきたい。出土別のデータの項にあったように、2重唐草文は甲府城全域で広く出土する。これは特定の建物に使用されたのではなく、ほぼ全ての建物に使用されたと見ていだろう。また数量的にも部分的な補修をおこなう補修瓦としてのみ用いられたとも考えにくい。ある時期に2重唐草文が甲府城全域の建物の軒先を飾っていたと考えられる。続いて層位の点で見ると人質曲輪北下のトレンチのデータでは12種類の2重唐草の中でNHW-2・10・11グループとNHW-3・9グループの新旧関係を確認することができた。NHW-2・10・11グループのほうがNHW-3・9グループより古く、NHW-2・10・11グループの中でもNHW-2・10のほうがNHW-11より古いということである。ただこの層位のデータでは、2重唐草文が使用された時期を甲府城の歴史の中に位置づけることは困難である。ただし、金箔瓦層に含まれる2重唐草文が少ないので、前述の同時期は築城期以降であることは確実であろう。築城期以降といっても廃城までは350余年の時間がある。この空間の中で2重唐草文が位置する時代を見出す資料として、胎土分析のデータは興味深い。全体組成、岩石鉍物組成等の比較において、2重唐草文が似ているのは築城期の瓦であり、新しい時期となる棧瓦とは異なっている。また、河西学氏は、若草町加賀美瓦窯産の瓦と甲府城瓦（2重唐草文）とによる胎土分析の結果から類似性が低いことを指摘している¹³⁾。この加賀美瓦窯は、享保元年（1716）に製造が開始されたという伝承と嘉永4年（1851）に甲府城に瓦を納めた記録がある¹⁴⁾。層位的な比較でも棧瓦を多く含む層より下層から2重唐草文は多く出土している。とすれば、2重唐草文は少なくとも1716年以前に使用が開始されていたわけである。築城期から1716年の間に大量需要のあったのは、寛文4年（1664）と宝永3年（1706）の修築であるから、2重唐草文はこの2つの修築のどちらかに限定するこ

とができるであろう。また、2重唐草文と築城期の瓦の胎土が似ていることから、築城期の瓦を製作した瓦窯で2重唐草文を製作した可能性も生まれる。とすれば、2重唐草文が使用された時期を築城期に近づけることができるので、寛文4年(1664)の修築にあてはめることができる。さらに層位のデータで確認できた2重唐草文内の新旧関係を考慮するならば、NHW-2・10・11グループが寛文4年(1664)修築時で、NHW-3・9グループが宝永3年(1706)の修築時という可能性も示唆できる。ただこうした時期決定の論拠をすすめていく上では、築城期の瓦の生産地特定と、加賀美瓦窯以外の瓦窯の瓦、あるいはそれ以外の生産遺跡出土瓦と2重唐草文のさらなる比較が必要になってくるであろう。ただし、末木健氏は、柳沢以前の生産地が明らかでない点について、修築などの需要期には、三河などの産地から職人を招へいし、官営窯を設立して焼いたために、産業として成立しなかったとしている¹⁵⁾。最後に甲府城以外の2重唐草文についても若干触れておく。今回の分類の条件をクリアしているもので現段階で確認しているのは熊本県の人吉城¹⁶⁾、福島県の泉城¹⁷⁾、奈良県の薬師寺¹⁸⁾、の3カ所であるが、いずれも2重唐草文の時期等については言明していない。

6 おわりに

本稿では甲府城出土の軒平瓦に着目した。その中でも比較的出土量の多い2重唐草文の分類を試みたわけであるが、今回用いた資料・データでは2重唐草文が使用された時期、製作された窯の明確な位置づけまではできなかった。ただ今回分類した2重唐草文以外の軒平瓦や軒丸瓦などの分類は今後の課題であり、これらの分類をすすめていくことで2重唐草文についての不明瞭な点が解明されていくであろう。また、全国的に調査、研究がすすめられている近世城郭・寺社等の瓦と比較していくことも課題の一つとして加えることができる。執筆にあたり、以下の方々にご指導・ご教示を頂いた。末筆ではあるが記して感謝する次第である。帝京大学 山梨文化財研究所 河西 学、若草町商工会 塩谷一郎、彫刻家 柳本伊左雄、アートニイズマ 大芝孝二、甲府市教育委員会 信藤祐仁・志村憲一、山梨県埋蔵文化財センター 八巻與志夫、弦間千鶴、堀江淑美、土屋道子(順不同、敬省略)

註

- 1) 織豊期城郭資料集成Ⅰ『織豊期城郭の瓦』 織豊期城郭研究会 1994
織豊城郭 創刊号『織豊期城郭の瓦』 織豊期城郭研究会 1994
- 2) 甲府城跡総合学術調査団編『甲府城総合調査報告書』 山梨県教育委員会 1969
大日本地誌大系『甲斐国志』第一巻「提要府治の項」 雄山閣 1968
- 3) 註2 参照
- 4) 註2 参照 大日本地誌大系『甲斐国志』第四巻「人物部第九の項」 雄山閣 1972
- 5) 註2 参照 山梨県立図書館蔵 若尾資料『甲府日記』「寛文四年一月～十二月」写本 1916
- 6) 註2 参照 『甲斐叢書』三巻「風流使者記」巻四 第一書房 1974
- 7) 大分県教育委員会『府内城三ノ丸遺跡』 1993

- 8) 駒井鋼之助『かわら日本史』 雄山閣 1981
- 9) 坪井利弘『日本の瓦屋根』 理工学社 1976
- 10) 木戸雅寿「信長の城郭と大和系瓦工人」『織豊期城郭研究会研究集会資料 同範・同紋・同系』 織豊期城郭研究会 1994
- 11) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第74集『甲府城Ⅱ』 山梨県教育委員会 1992
- 12) 註11参照
- 13) 河西 学「甲府城瓦と加賀美瓦－岩石学的胎土分析による比較－」『山梨県考古学論集Ⅲ－山梨県考古学協会15周年記念論文集－』 山梨県考古学協会 1994
- 14) 若草町誌編纂委員会『若草町誌』 1990 加賀美瓦窯の発祥について1716年は伝承である。『甲斐国社記・寺記』の法善寺の項では、1798年頃を発祥とする。
- 15) 末木 健「山梨県に於ける近世瓦窯について」『山梨県考古学論集Ⅲ－山梨県考古学協会15周年記念論文集－』 山梨県考古学協会 1994
- 16) 人吉市教育委員会『人吉城跡Ⅳ』 1989 3点確認する。
- 17) いわき市埋蔵文化財調査報告第31冊『泉城跡』 いわき市 1992 2重唐草文について江戸式と述べているが、時期についての詳細な説明はない。4点確認する。
- 18) 註1参照 1点確認する。

主要参考文献

- ・ 甲府城跡総合学術調査団編『甲府城総合調査報告書』 山梨県教育委員会 1969
- ・ 駒井鋼之助『かわら日本史』 雄山閣 1981
- ・ 管原正明「紀州における近世瓦の系譜」『日本考古学協会第59回総会研究発表要旨』 日本考古学協会 1993
- ・ 末木 健「山梨県に於ける近世瓦窯について」『山梨県考古学論集Ⅲ－山梨県考古学協会15周年記念論文集－』 山梨県考古学協会 1994